

「第6回 世界自然保護会議（ハワイ）」に参加して

著者	三ツ井 聡美, 船木 大資
雑誌名	世界遺産学研究
巻	3
ページ	53-54
発行年	2017-03
URL	http://doi.org/10.15068/00145870

「第6回 世界自然保護会議（ハワイ）」に参加して

三ツ井聡美・船木大資¹⁾

所属 1) 筑波大学 人間総合科学研究科

Participation in 6th World Conservation Congress

Satomi Mitsui, Daisuke Funaki¹⁾

1) World Heritage Studies & World Cultural Heritage Studies, Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba

1 はじめに

世界自然保護会議は4年に1度開催され、世界中の自然保護の取り組みに関する報告や議論が行われている。6回目の開催となる2016年度は、ハワイ・ホノルルで9月1日から10日までの10日間行われ、世界190か国1万人以上の、政府機関やNGO等様々な立場の人々が参加していた。フォーラムと会員総会の2部構成になっており、フォーラムでは生物多様性保全のためのアイデアの報告など、4日間で約1400のイベントやワークショップが行われ、会員総会では今後4年間のIUCNの活動ビジョンが掲げられた。

2016年度、自然保護寄附講座のフィールド活動支援制度を活用して、学生2名が参加したので、その報告を行う。

2 会議での発表・議論（三ツ井）

筆者は特に外来種対策や、自然と文化のつながりに関するイベントに参加した。外来種対策の政策への導入方策を議論するイベントでは、金融や貧困、水質問題など各国で優先的に実施されている政策の状況を踏まえた発表および議論がなされていた。また、外来種対策が人にとってリスク回避の意義を持つことを強調する提案やワークショップがあった。研究発表というより、現在起こっている問題をどう解決するのか、実務的な内容が多かったのが印象的である。また、筆者が修士論文で取り上げたような、島嶼地域の外来種侵入防止策については、例えば野ネコを避けるための柵の設置や、保全対象種の野生個体を保護・繁殖させて、再度野外に放す取り組みなど、各地の活動報告があった。

世界自然遺産に関連するイベントでは、IUCNとICOMOSによって、自然遺産にオーセンティシティ（真実性）の考え方を適用する可能性について白熱した議論が行われていた。その他、様々な話題に関する各地の課題や実施している対策について、参加者同士で議論をしていく機会が多くあった。今回の会議のコンセプトある”Planet at the crossroads 「岐路に立つ地球」”の課題に取り組む世界の流れを肌で感じ、筆者自身研究成果を、4年後の次回会議で発表し議論に加わりたいと、研究意欲が益々高まった。



セレモニーの様子



イベントでの議論

学生の時期にこの会議に参加し、実務的な世界の流れに触れたことは、今後の研究に取り組む指針を得ることができ、非常に有意義な機会であった。

3 ハワイ先住民の生活（船木）

今回会議が開催されたハワイには、かつては先住民が広く生活しており、現在も一部にそのような地域が残っている。会議の合間に、ハワイ島北部に位置するワイピオ・バレーでの生活を見学してきた。

ワイピオ・バレーでは、ハワイ先住民たちが作り上げてきた、アフプアアと呼ばれる伝統的な生活空間が広がり、そこで現在も約 150 人が生活している。アフプアアは谷によって囲まれた扇状地で、山から海まで地形が連続している。中心には川が流れ、谷底の中央に広がるタロイモ畑が特徴である。豊富な降水量によって、この地域のアフプアアは水が絶えることはなく、住民に豊かな食料を供給し、文化の基盤となったといわれている。

溪谷内にはグアバやアボカド、ノニ等が多数自生し、肥沃な土地であることが実感できる。海に開けた土地でもあるため、住民は豊かな水産資源の恩恵も受けることができる。また、野生の馬やイノシシ等も生息しているという。参加したツアーのガイドは、タロイモを栽培し、魚を釣り、ノニジュースを飲む、という質素な生活の中で育てられた、と語っていた。溪谷内のメインストリート沿いには学校や宿がある。宿はかつて教会としても機能していた。現在溪谷内では 6 世帯が電気を利用しており、生活を大きく崩さない範囲で近代的な技術が導入されている。

生まれてからずっとこの地域で生活しているというツアーガイドは、ここで未だに伝統的な生活が続けられている理由として、隔絶された土地であるために近代化が進まなかったこと、また 'Men take care of land, land takes care of men' という彼らの思想が根付いていることなどをあげていた。彼は話の中で何度も 'connection' や 'relationship' という言葉を繰り返しており、「つながり」を大切にしていることがうかがえた。

ワイピオ・バレーも、かつてと全く変わらない生活が続けられているわけではない。しかし、人と土地が密接につながっているという良好な関係は維持されている。近年、伝統的な生活や文化は価値あるものであり、保護していくべきだと盛んに言われているが、実際は消滅の危機にあったり、残っているように見えても形骸化していたりすることも多くみられる。伝統文化や生活がこの先も残っていくためには、ワイピオ・バレーでの営みから学ぶべきことがたくさんあるのではないかと考えている。



ワイピオ・バレー



アフプアア

4 帰国後（世界遺産専攻での報告会）

会議場で議論された内容について、筑波大学に戻ってから報告会を開催した。報告後の議論では、自然遺産におけるオーセンティシティや価値基準について、自然遺産に関する研究をしている学生だけでなく、普段は文化遺産について研究している学生とも情報を共有し、様々な視点からの意見交換ができた。

次回の世界自然保護会議は 2020 年だ。この年は、東京オリンピックだけでなく、愛知ターゲットの達成を目指す年でもある。遺産の保護を考える者として、今回見聞きし学んだことは貴重な財産になっていくと考える。世界の自然保護に関する潮流に関心を向けつつ、筆者自身も研究成果を上げられるように邁進したいと考えている。